

VII

オセアニア



祭りの時の盛装。後ろにはブゲの葉をさし、左肩にはガピ・ワレをかけ、腕にはオンギをはめている。
(撮影：塩田光喜)

裸と着衣に関する一章

塩田光喜

是において彼等の目俱に開けて彼等其裸體なるを知り

乃ち無花果樹の葉を綴りて裳を作れり

旧約・創世記三十七

ここに『世界の秘境シリーズ』という雑誌の一九六七年六月号がある。特集は「ニューギニアの原始裸族」。なつかしい名前である。

当時は確かに「裸族」という語がニューギニアという地名にかかる、いわば枕詞であった。つまり「裸」であることは、ニューギニア高地の秘境性を端的に示す徴であったのだ。事実、ニューギニア高地の「裸族」たちが文明世界の人間に初めて遭遇したのは、今世紀もすでに三十年が過ぎた頃のことであった。それまで、近代文明はもとより、インド文明も中国文明も、およそ文



盛装して祭りの場を行進する男たち。胸にはトゥミリ、右手に石斧、左手には弓矢、額にはドゥム、そしてワインベルをはためかせ進んでいく。

明と名のつく一切のものから隔絶して、太古以来の石器文化の只中にあつたニューギニア高地の「裸族」たちが「服」を着た人間を見たのはその時が初めてであつた。東西数百キロメートルにわたつて広がるニューギニア高地には一九六〇年代になって初めて服というものを見た人間たちもいたから、六七年には「ニューギニアの裸族」は未だ至る所で健在であつた。

それから二十四年。

一九九一年八月、私がパプアニューギニア（一九七五年に独立）の首都で出会つた日本のあるテレビ番組のクルーは「この人たちに裸になつてもらうにはいくら出せばいいんでしょうか」と質ねてきたのだつた。九一年「裸」で歩いてゐるニューギニア人を見つけてるのはそれほど困難になつていたのである。

Tシャツにジーンズをはいたニューギニア人では「絵」にならない。ということとは、我々が未だ、「裸」で暮らす人間たちにかに強い奇異（と好奇）の念を抱いてゐるかの証左である。

逆もまた真なり。初めて服を着た白人たちにぶつかってニューギニアの「裸族」たちもそのあまりの異様さに仰天したのである。肌の奇妙な赤白さ以上に彼らが驚き、恐怖の念すら抱いたのがその服と眼鏡であった。それは一体、肉体の一部なのか、肉体の一部であるとすれば、何と奇妙な形に隆起した眼、何と異様な皮膚であることか！

さらに服が着脱できるものであることを知った「裸族」たちは、親たちから聞いていたお伽話を想い出した。そこでは、主人公や敵役が、皮膚を脱いで、別の皮膚、たとえば鳥の翼を着けることによって鳥に変身するのである。

この連中は魔か神々か、それとも精霊か、と推論は進んでいく。

ニューギニア高地で「体」に当たる単語は多くの場合、同時に「皮膚」を意味する。それは、我々の「からだ」という語が、せみや蛇の抜け「がら」といった語と語幹を共有するという事情とも通じ合う。人間の「からだ」とはせみや蛇の「から」のようなものではないのか。ニューギニア高地のかつての「裸族」の一つ、インボング族の伝承は、この世の始め、人間は老いた「からだ」を脱ぎ捨てることにより不老不死であったと伝えている。だとすれば、この異様な者どもは先祖の祖先たちが帰ってきたものなのか。

服を着た白人たちの出現はニューギニア高地を大混乱に陥れたのである。

ある者たちは村を挙げて洞穴に身を潜め、ある者たちは用心深く女子供を森に隠した上で白人たちに近づいていった。幸い、白人たちも、二十世紀も三十年以上たった頃には、かつて南北ア

メリカ大陸やオーストラリア大陸で示した苛酷さを矯め、はるかに温和で人道主義的になっていった。

そして、白人行政官や宣教師たちが定着するにつれ、しだいにこの者たちも人間だということがわかってきた。と同時に、服というものが自分たちが袋として使っている植物の繊維を編み上げた網袋のようなものであることがわかってきたのである。インボング族は服のことをワリ・パゴリ（ひっかぶる網袋）と呼んだ。こうして神秘は消え、謎は解消された。

逆に、白人たちは、人種間の区別を明示するためニューギニア人が服を着ることを禁じていたが、やがて教育の普及とともに、学校を出て植民地政府に職を得たり、宣教師の助手として働いていた者たちの間から着衣の習慣が広まってゆき、一九九一年には「裸族」はほとんど姿を消していた、というわけである。



半盛装でごきげんな2人。顔を黒・赤・白に塗っている。



身づくろいをしあう2人の男。男たちの中には手鏡持参で化粧にいそむ者も多い(左の男はトランクスの上に伝統的なまわしやさがりを縮めているのが新しい現象である)

遮断される。そして、局部が覆われている限り、人間は裸ではない。アダムとイヴが禁断の知恵の实を食べて初めてまとった衣は局部を隠すイチジクの葉であったと旧約創世記は言うが、まさしく、衣服の原点はこの局部の覆いにある。

たとえば、インボング族においては、赤ん坊は全裸で育てられる。それが、局部の覆いを始め

さて、そうしたニューギニア高地の「裸族」たちであるが、彼らは自分たちが「裸」であるなどは夢にも思っていなかった。実際、彼らが全裸であったわけではないのである。ニューギニア高地の装身文化の分界線は、ニューギニア高地のほぼ中央を南北を割って流れるストリックランド河で、その西は有名なペニステース文化圏、東は「まわし、さがり」文化圏(と呼んでおこう)とに分かれるのであるが、いずれにおいても何らかの形で局部は覆われ、他人の視線から

るのは、片言ではなく大人と会話が出来るようになる頃、「恥」(ピピリ)を感じ始める頃である。「恥」(ピピリ)とはおそらくピピ(覆い)を奪われた状態という「ピピ・デイリ」の短縮形であると考えられる。インボング族の社会行為を根底から律するこの語には、他者の視線に対する強烈な意識が込められている。すなわち、他者の視線に対して覆いを奪われた状態(ピピ・デイリ)を味わわなくても済むよう入念に自らの姿や行為、思考や感情を覆い、さらには、美々しく力強く装うことにより、その視線を吸いつけた上で、他者自身の元へ撥ね返す(つまり、他人は彼の姿や行為を見ることで自分の貧弱な姿を思い返して恥ずかしくなる)こと、これがインボング族の、とりわけ男たちの生を駆り立ててやまない窮極の情熱であり、快感であった。そして、その第一歩は言葉をしゃべり、恥を感じるようになって、局部を覆い始める所から始まるのである。つまり、インボングの男たちは、言語的存在であることと、社会的存在であることと、性的存在であることの自意識を同時に開始するのである。一方、父親たちは息子たちの将来に備えて、耳飾りや鼻飾りができるような耳や鼻にピアスを入れる。それらは男にとって、祭りの時の盛装には欠かせないアクセサリーなのであった。

こうして、言語を巧みに操る能力(雄弁は男たちの最も重要な資質である)、社会的役割を自ら演出し、それを見事に演じ切る能力、そして男として女を魅する性的魅力をめぐる一生をかけた競争場裡にインボングの男たちは入っていく、長じて、ブタや貝のペンダントといった財宝の数々を人々に惜しみなくふるまうべく祭りを催す時に、クライマックスにたつする。この時、祭り

を催し、腕飯振舞いをする側も、財宝を受け取りに来る側も、能う限り美々しく装って祭りの場に現れるのである。

そのいでたちと言えば、

腰に木の皮まわしを締め、

前には木の筋糸編み上げたるさがりを

垂らし、

後ろには沼アヤメの深紅の葉をさして、

革皮編んだる腕輪をはめ、

弓矢手挟み、腰には石斧、

胸には銀白に輝く三日月の貝、

豕の牙の鼻飾り、貝のビーズの耳飾り、

赤、白、黒、黄、とりどりに

塗ったる顔は極彩の

極楽鳥か火喰鳥、

貝の額当て白く輝き、



イエイ！とポーズをとるウィルアベ老人（ヤラセではない）。年齢不詳，推定60代後半，かつての裸族の1人である。グラスはいなせな男たちの必須アイテムになりつつある。

己の髪もて編み上げたる
ナポレオン帽のその上に、
赤、青、黒、白、目も彩に、鳥の羽編んだる羽根飾り、
脂を塗つたる全身は噴き出す汗に黒く輝く、

四列縦隊、隊伍を組んで、
シッ、シッ、シッ、シッ、の息音鋭く、
膝高々と脚を上げ、
足並み揃えて踏みおろす、
祭りの場には見物衆、
並居る前を練り歩き、
力と美々しさ競い合う。

ここでは、裸と着衣の散文的な二分法は意味を失い、「さらす」と「かくす」の織りなす動的弁証法にとって代わられる。

「隠された性」は隠蔽されることにより、逆に全身に浸透し、エロティシズムとして発散するのである。

すなわち、「衣服」とは体を覆う部分と曝す部分との総体から成り、人間の単純な性的事実をエロティシズムへ変換・昇華させる装置なのであった。

(しおた みつき／アジア経済研究所地域研究部)